発達障害児における音楽の作用についての研究

株式会社 LITALICO LITALICO ジュニア　児童発達支援　　上　村　菜々美

はじめに

筆者は学生時代から現在にかけて、児童発達支援・放課後等デイサービスにて自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD と記載）や注意欠如・多動症（Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder：以下 ADHD と記載）等の神経発達障害を抱えた子どもたちと関わっている。その子ども達との関わりの中で、コミュニケーションがうまく取れないことによって他児とケンカをしてしまうなどの対人関係におけるトラブル、欲求をうまく言葉にできず相手にうまく伝えられない、あるいは情緒をコントロールできないことによるストレス、それによって自分の頭を殴ってしまう、他児やスタッフに対して突然叩いたり噛みついたりするといった自傷他害などを目にしてきた。限られた空間の中でそのような子ども達と関わるスタッフも対応に追われ、また保護者も発達障害を抱えた自身の子どもとの接し方について、悩みを抱え込んでしまうこともある。このような問題は発達障害を抱える子どもにとって大きな不安や困り感に繋がり、将来的にも大きな困難に至る可能性がある。また、子ども達だけでなくスタッフや保護者にも悩みや不安が生じることが考えられる。

筆者が音楽に焦点をあてたきっかけは、児童発達支援・放課後等デイサービスでの体験によるものである。パニックになった際に音楽をかけると落ち着きを取り戻すことや、音楽をかけると発語が困難な子どもが歌を歌おうとする行動を見たことなど、音楽が子ども達に何か影響を及ぼしていると考えられる場面が散見された。また、音楽がかかっていても身体を動かそうとしなかった子どもが、スタッフも一緒に身体を動かすと子どもも起き上がって身体を動かすなど、そのような場面を目にして、神経発達障害児にとって音楽にはどのような作用があるのかを研究してみようと考えた。

Ⅰ．問題と目的

1. 子どもにとって音とは

①お腹にいるときに聞こえてくる音

赤ちゃんが外界とコミュニケーションをはかろうとする際、周囲から入力される情報は最初、メロディーとしてやってくる。受精して 4 か月後、胎児に聴力が発達する。もちろん羊水に包まれているため、外界の音が筒抜けというわけではない。成人に匹敵する聴力を備えつつも、胎児が実際に耳にする音はたいへん限られたものとなってしまう。しかし、ⅰ）母体そのものが産出する音、ⅱ）妊婦自身の出す声、の 2 種類の音を胎児は聞き取り、記憶していることが証明されている。実際に、1980 年アメリカのノースカロライナ大学の心理学研究室の Decasper&Fiher（1980）によって、出生直後の新生児が母親の声を女性の声と区別して知覚していることが報告されている。また、妊娠 35 週以降でまだおなかに赤ちゃんがいたときに話して聞かせた童話を、出生後にハミングで母親にうたってもらう実験が行われた結果、語り口調の周波数と音圧変化の全体的輪郭を手掛かりにして、馴染みのある話をそうでないものと弁別できることが分かった。つまり、母親が出す子どものメッセージは、旋律として把握されており、母親の胎内にいる頃から、人は音楽と関わりを持っているということが言える。

②子どもにとっての音楽

Orff, G（1914 ～ 2000）は音楽療法家である夫、Orff, C の教育法から、オルフ音楽療法を生み出し発展させた。オルフ音楽療法とは子どものありのままの姿から出発し、展開されていく子どものありのままの姿を受け止めあうものである。なにより、子どもと遊びを大切にしたものとして親しまれている。細川・和田（2006）は、『オルフ･シューベルク　音と動きの教育セミナー』にて、普段日常を過ごしていく中に音楽的要素があり、そこから自分を表現する方法を見つけていくことができると述べた。それこそがまさに遊びであり、遊びがおもしろければおもしろいほど、遊びは発展し創造的になっていくと同時に、感覚が鋭くなっていく。そこにイメージの広がりやファンタジーが生まれて、誰かと共有したいという欲求が出てくるのではないか、身近にある音楽的要素が遊びに、そしてその遊びが発展し他者とつながるきっかけを作るのだと述べている。

③子どもにとって音楽は遊びが前提であるということ

橋本（1995）が述べるところによれば、Winnicott, D は、「遊ぶことにおいてのみ、個人は子どもでも大人でも創造的になることができ、その全人格を使うことができ、そして個人は創造的である場合にのみ、自己を発見することができる」と述べている。また、乳幼児期の遊びは、母親など最も身近な人に「抱っこ」してもらうという絶対的依存のなかで、生理的な障害から保護され、皮膚感覚、触角、温覚、聴覚、視覚を敏感にし、重力の作用を体感していく。この状態から､興味あるものに手を伸ばし、使用してみることを経て、遊ぶということが成立していくとして、Winnicott, D は Holding（いかなる表現をも受け入れられる環境）を提唱した。その中で細川・和田（2006）は、遊びの中には、現実と幻想の世界を行ったり来たりする移行現象があり、文化、芸術の世界は、まさにその役割を担うものであると述べている。また、遊ぶことは時間を必要とする。遊びを引き起こし、継続させる環境、設定、道具を吟味していくことが大切である。そして、そこに音楽を添えると、遊びの時間空間を保っていくものとなり、そのような音楽に包まれた（hold された）空間の中で体を動かし、集団関係へと導かれていくと述べている。

④様々な感覚に働きかける音楽

小澤ら（2018）は、一般的に音や音楽というと「聴く」ということに注目することが多いが、音や音楽にはそれだけではなく私たちの多様な感覚に働きかける力があると考えている。中島･山下（2002）は、音や音楽体験における感覚の体験として、「聴く、見る、動く、感じる、考える」の 5 つを挙げており、音や音楽体験は「聴く」だけではなく様々な感覚、体験を引き起こすものであるとしている。

⑤障害を持った子どもにとっての音楽

馬場ら（2001）は、音楽療法の臨床効果を検討する研究を行った。小児の対象を 8 つの障害（精神遅滞 / 児、自閉症、ダウン症、不登校、精神遅滞 / 者、脳性麻痺、重心･重度精神遅滞、肢体不自由）に分け、小児に対する音楽療法の効果を全体で見ると、特に上位の項目として、対人関係能力の向上、社会適応の促進、意欲の向上、情緒の安定、感情表出の増加、運動能力の向上が挙げられた。遠山（2002）は、これらの項目が音楽療法の目標につながると考えた。そしてこれらの項目に焦点をあて、目標達成のためにどのような考え方により､どのような内容･方法等で音楽療法を進めていけば良いかを以下のように検討した。

1）対人関係能力の向上

セラピストは「なぜ、こうした状況が生じているのか？」という疑問を持ちながら子どもの状態を把握するように努める必要がある。音楽療法のセッションでは、歌いかけたり楽器を使って音を聴かせたりする。または、身体の動きを伴う活動に導くなどして様々な刺激を与えることにより、セラピストの存在に気付かせ、

あるいは関係が生まれ、それが徐々に深まっていくように導く。ここでは、対象者にとってセラピストが意味のある存在になることが重要になる。

2）社会適応の促進

セッションの中で子どもたちは、セラピストの演奏を聴いたり提供される刺激に集中したりする体験をする。子どもは、セラピストが一人ひとりにかかわっている間待つことを学ぶ。仲間の演奏を聴いたり、表現したりする。また、みんなと一緒に楽器をならしたり、ダンスをしたりするような体験もできる。このような体験は、社会に適応するための基礎的な能力を身に着けていく上で重要な意味を持つのである。

3）意欲の向上

障害のある子どもは、自分自身についての認識が不十分であり、そのために自信を持って活動に取り組むことができないでいる場合が多くみられる。このような場合、音楽活動に参加することを通して、子どもが自信を持てること、自分ができることを発見する体験を積めることが大切である。活動に参加することの楽しみ、喜びを体験することによって、子どもは自ら積極的に活動に参加するようになる。その際、セラピストは子どもの表現を認め称賛を与えることが必要である。その働きかけの積み重ねが、子どもの意欲を向上させる上でとても大切である。

4）情緒の安定

障害のある子どもは、自分の思いを他者に伝えにくかったり、思うように身体を動かしにくかったりする。新しい環境への適応にも問題を抱えている場合が多い。その結果、情緒が不安定になり、いらついて自分の身体を傷つけたり、他者に当たったりする状況が生まれる。このような場合、音楽は子どもたちの情緒の発散に大きく貢献する。音楽に乗っての激しい動きの体験、衝動的な音を通しての気分の発散、あるいは大きな声による表現の体験等によって、普段抑え込まれている感情や気分を外に打ち出す体験が子どもの情緒を変化させるのである。遠山（2002）の経験からも、こうした発散的な体験の後に情緒が安定する場合が多かったと述べている。激しい体験だけでなく、静かで鎮静的な音楽に聴き入る体験も情緒を安定させる。

5）感情表出の増加

障害のある子どもは、あまりうまく感情表現ができていない場合が多い。表情の乏しさは対人関係の発達にマイナスの条件となってしまう。音楽は直接感情に働きかける世界でもある。子どもたちは歌をうたうことによって様々な感情を表現する体験を積むことが出来る。遠山（2002）の経験の中で、「お花が笑った」という歌を通して様々な感情を表現させた例がある。この曲を使って「替え歌」にしながら子どもたちにいろいろな笑いを聴かせたところ、この表現に引き込まれるようにして笑いだした少年がいた。この体験ののちに彼は、旋律の一部を歌ったりリズムを表したりして、楽しい体験の繰り返しを要求するようになるなど、豊かな感情表現を体験することができたのである。

6）運動能力の向上

音楽の活動には、常に運動が伴う。子どもは楽しんで音楽に参加するうちに、結果として運動機能の向上を獲得することができるのである。音楽の活動には、歩く・走る・跳ぶ・止まる・動き始める・踊るなどの粗大運動に関するもの、手指で楽器に触れる・楽器を鳴らすなどの微細運動に関するもの、歌う・声を出す・吹くなどの発声に関するものなど様々な運動機能に関係する要素が含まれる。

以上のように、障害を持った子どもにとっての音楽の効果として挙げられた6つの項目に対し、それをより効果的にするための考え方や内容・方法を検討したものを述べてきた。音楽は遊びをベースにし、表現の方法や社会能力、そして運動能力の向上にもつなげる力があることが考えられる。

2. 療育場面における音楽について

発達障害児に対する療育場面では、頻繁に音楽が用いられている（黒山, 2009）。発達の初期において手遊びの要素である動き、歌、言葉が、子どもの身体機能や認知機能を高めるのに有用であることを遠藤（1998）は指摘している。

またリズムについて、大谷（2007）は「リズムは身体機能（心拍数や呼吸など）、身体運動（歩行など）とも直接関連しており、生命の根源的なエネルギーの表出や創造となること、また最も初期、すなわち胎児期から感知されており、発達の初期段階の子どもには打楽器によるリズム打ちが最も一般的なことなどから、音楽療法において非常に重要である」と述べている。

このように、リズムは身体機能や運動機能にも直接関連し、胎児期から感じているものである。先に述べたように、胎児期から音やメロディーは存在し、音楽は人にとって根源的なエネルギーであることが分かる。そうであるからこそ、常に人と密接な関係にある音楽の効果を見つけ、それを人の治療に発展させることができる。それを音楽療法とし、療育場面で遊びとして子どもの情緒面と行動面での発達や一体感を促進させているのである。

3. 発達障害児への音楽を用いた事例

発達障害を抱えた子どもを対象に、中山ら（2006）は ABA アプローチにおける音楽療法を実施した。以下事例を挙げる。

＜自発性が低く、自傷行為のある子の事例＞

保育園の生活になじめず、問題行動として床に頭を打ち付ける問題行動が見られる女児（4 歳）。個人セッションの場に慣れるまで泣いていることが多かったが、ピアノの音が聴こえたり、楽器が出てくると泣き止み、視線を向けることが増える。子どもの前に簡単な操作の楽器を置き、セラピスト（音楽療法士）が子どもの動いているのに合わせて即興でピアノを弾く。自分が動くとピアノが鳴ることが分かってくると、次第に期待してセラピストを見て、足を動かしたり、頭を振ったりするようになり、自分から目の前の楽器に手を伸ばし、音を鳴らすようになる。このセッションを通し自発的な動きが多くなってからは、自傷行為がほとんど見られなくなっていった。

この事例では、音楽が好きという女児が自分の行動に合わせた即興音楽に気が付いた時から、身体的な動きが増したり楽器活動を行うなど、活動性が高くなっていった。このように適切な自発行動が増えたことによって、床に頭を打ち付ける問題行動がなくなったと中山ら（2006）は考えた。その他にも、女児とセッションを行ったセラピスト（音楽療法士）との関係の間にも音楽による情緒的な交流がなされたこともこの結果につながっていることが考えられる。細川・和田（2006）が、遊びがおもしろければおもしろいほど、発展し創造的になっていくと同時に、感覚が鋭くなっていき、生まれたイメージやファンタジーを誰かと共有したいという欲求が出てくるのでは、と述べたように、この事例においても女児が自傷行為ではなく音楽で自身を表現することを学び、そこから彼女の世界観が生まれ、それをセラピスト（音楽療法士）と共有したいと思ったのかもしれない。

4. 本研究の目的

先行研究では、私たちと音楽は胎児期から密接な関係にあり、また、音やそれに伴う身体の動きなどが子どもの身体感覚や他者との情緒的交流を促進させることが明らかにされている。一方で、その音楽が子ども達にとってどのような意味・作用があり、どのようなメカニズムで問題行動の減少や対人関係が形成されるかについては十分に明らかにされていない。

そこで筆者は、音楽または音楽遊びが発達障害を抱えた子ども達にどのように作用し、それが子ども達にとってどのような意味やメカニズムがあるのかを分析・考察することにした。また、音楽を通して子どもとスタッフ、つまり他者との間にはどのような関係性が生まれるのか

についても分析、考察し、今後の発達障害児に対する支援のあり方、音楽の効果的な利用法についての新たな知見を探ることを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 調査対象者

調査対象者は、児童発達支援・放課後等デイサービスにて発達障害の子どもと接しているスタッフ９名であった。

2. 質問項目

半構造化面接を実施した。発達障害児における音楽の作用について、音楽活動の内容、音楽活動をしている際の子どもの様子、その様子から見た音楽の効果の順にインタビューを進めた。

3. 分析方法

木下（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified-Grounded Theory Approach）を参考にした分析法を用いて、インタビュー内容を逐語録におこし、音楽を通じた子どもの行動や、音楽の作用について考えられる箇所を抽出してコード化し、類似するコードを集めてカテゴリーを生成した。

4. 調査協力者に対する倫理的な配慮について

インタビューの際、研究の質を高めるため、調査対象者に同意を得た上でIC（Integrated Circuit）レコーダーにて録音を実施するが、本研究以外の目的で使用しない。また、インタビューで得られた記録については厳重に保管する上、個人が特定されないようアルファベットを用いて論文等に記載し、研究終了後は速やかに記録を処分する。また、同意書に署名した後の調査協力の中断や、調査に同意されない場合による不利益を対象者が被ることは一切ないことを伝えた。さらに、花園大学において研究倫理申請を行い、倫理委員会の承諾を得た。

Ⅲ．結果

分析の結果、音楽を通じた子どもの行動や、音楽の作用についての分析から87個のコード化がなされ、そのうち、【つくる】【つなぐ】【生み出す】【力になる】【安全地帯】【流れる】の領域に分けられた。カテゴリーとして、【つくる】には＜一日の流れをつくる＞＜場の雰囲気をつくる＞の２つ、【つなぐ】には＜新しい世界とのつながり＞＜音楽が他者とつなぐ＞＜場面をつなぐ＞＜活動の維持＞＜音楽と自身の感覚をつなぐ＞＜優れた音楽に引き付けられる＞の６つ、【生み出す】には＜達成感＞＜自己表現＞の２つ、【力になる】には＜活動の原動力＞の１つ、【安全地帯】には＜安全地帯＞の１つ、【流れる】には＜気持ちを維持させ、落ち着ける＞の１つ、合計13個に分類できた。以下、それぞれのカテゴリーについてエピソードを引用しながら述べる。【　】は領域、＜　＞カテゴリーとして記載している。No.は調査対象者を示している。

1. 音楽を通じた子どもの行動や、音楽の作用

①【つくる】のカテゴリー

＜一日の流れをつくる＞の定義は、「音楽の持つ流れやリズムを利用して、日常のペースを形成していく」である。＜場の雰囲気を作る＞の定義は、「音楽が施設全体に影響し、雰囲気を穏やかにさせることで、施設そのものが安定した場所として機能し始める」である。

ｉ）＜一日の流れをつくる＞

「ピアノ？自動演奏器ですかね。音楽が好きな子がいて、来られたら自分で流して過ごすっていう」（No.5）や「自動演奏っていうのがピアノについてるんですけど、それに興味があって流してたら落ち着くっていうのもあって、その子が来所したら自動演奏流してっていう感じで、1日のけっこう、自動演奏でけっこう・・流れてるって感じですね」（No.6）の語りから、自分から音楽を流すことで一日のスタートや、一日の流れを作ることができる。小学校でも、朝に穏

やかで爽やかさを感じられるような音楽が流れる中で登校することがある。その音楽が流れることで、「今日も 1 日が始まるぞ」と子ども達の中で 1 日を始められるような心構えをつくることを促進していることが考えられる。

ⅱ）＜場の雰囲気をつくる＞

音楽が日常的に流れていると、その音楽がスタッフにも影響する。「音楽、嫌な子もいるのかもしれないですけど、別にならしてるからってやめてっていう子もいないですし、あまり大きい音だと下げてってなるんですけど。流れてるのが自然な感じなので、音楽が穏やかに、私も穏やかになります」（No.5）といった語りから、音楽が流れていると子ども達だけでなく、スタッフにも影響していることが分かる。スタッフにも影響することで、音楽は施設全体の雰囲気をつくり、さらにそれが施設の「穏やかさ」として機能することが分かる。

②【つなぐ】のカテゴリー

＜新しい世界とのつながり＞の定義は「音楽が子どもの興味を引き出すことで、新しい世界として体験できる機会となる」である。＜音楽が他者とつなぐ＞の定義は「音楽があることによって、音楽がスタッフとの話題になったり、ノンバーバルなコミュニケーションの役割を果たす」である。＜場面をつなぐ＞の定義は「音楽が場面と場面をつなぐ架け橋として機能し、日常が流れ、音楽があることで次の行動に移行することができる」である。＜活動の維持＞の定義は「活動を続けるためには音楽が流れ続けていることが最優先であり、音楽が流れている中であれば活動を維持して行うことができる」である。＜音楽と自身の感覚をつなぐ＞の定義は「自身の感覚とは目に見えないものであるが、音やリズムをツールとしてそれを自身の感覚にすることができる」である。＜優れた音楽に引き付けられる＞の定義は「優れた音楽の迫力や魅力が子どもの意識を向けさせる」である。

ⅰ）＜新しい世界とのつながり＞

「ハープの先生も演奏しに来てくれたりして、本当になんか、クリスマス会とかイベントの時に来てくれる程度で、でもやっぱり子どもたちは新鮮なのか、みんな興味津々で。普段しゃべれない男の子とかもすごく喜んで飛び跳ねたりとか、実際近づいてみてギターに触ってみたりとか、ハープを触ってみたりとか。子どもにしたらすごい興味あるみたいで、やっぱり普段めったに接することのない音楽っていうのは新鮮だし、やっぱりうれしいのかなと思って。」（No.1）、「鈴を鳴らしたりとか、この楽器を見に来てもいいよって言ってくださったりして、やっぱりみんなそういうのめずらしい、見せてもらうっていうのがなかったりするので、行ったりとかしてて・・」（No.9）の語りから、普段触れないような楽器を目の前にし、子ども達は新鮮さを感じ、興味津々な様子で楽器に触れていることが分かる。

また、「（音楽が）その子の興味を引き出してあげることもできてるんかなって。簡単な曲だけでも一曲弾けるようになることってすごいことやと思うんです。その興味を引き出してあげることができてるかなーって」（No.9）の語りからも、音楽は子ども達の興味を引き出すことができることが分かる。その興味がこれまで見なかった新しい世界とつながるきっかけとなり得るのではないだろうか。

このように音楽は、子ども達と今まで触れたことのないような新しい世界との間をつなげる作用があることが考えられる。

ⅱ）＜音楽が他者とつなぐ＞

「特に今一番、この子（ある子を指し）は、最近の曲がすごい好きで、J-POP とかすごい知ってはって、最新曲とか。だから、その話題も好きやし、それを流したらなんかすごい照れるっていうか、大人しくなる。なんかうれしいのかなんか知らへんけど踊ってよとか言ってきて。けっこうすごい喜びはるから、帰りの車の曲とかもすごいいじって」（No.1）、「ふつうにピアノを弾いてる子に関しては、私が弾ける曲であれば弾いてみたりとかして、そしたらすごいそ

れってどうやって弾くのやったりとか、この曲って弾ける？とか、また違った関わりにできるかなって」（No.9）の語りから、音楽が相手とのコミュニケーションの中で話題になることや、音楽を教える、教えてもらうといったスタッフと子どもの関係をつなぐツールとなることが考えられる。

また、「猫ふんじゃったかなんかの、前まで弾けへんかったのに、ある日弾けるようになってはって、すごいやん弾けるようになったやんっていったら、誰々リーダーに教えてもらったとかって。他の指導員もそういった形でコミュニケーションとってくれてはるんやなーっていうのにも私の中で分かったことやったんですけど」（No.9）の語りにみられるように、音楽が施設の共通言語のような役割を持っていることがうかがえる。

iii）＜場面をつなぐ＞

「特定の子なんですけど来所してからもその自動演奏器を流すっていう。行動の中で一種のその習慣になっている感じがして、それをしないと次の行動とかやるべきことに移行できない子がいて、その子が利用されるときはそれを独占的に使ってますね。」（No.8）の語りから、音楽があることによって場面と場面がつながり、次の行動に移行することができる。また、「基本的には自由に、したいときにっていうのが多いと思うんですけども、その中でももしかしたら気分転換がてら曲を聴きたいからそこに行っておられる方もいるのかなと思います」（No.7）の語りから、普段気持ちを切り替えることが難しい状況であっても、音楽が切り替えにおいて補助的に作用しているのではないかと考えられる。

このように、音楽は気持ちの切り替えの補助的に加え、切り離された場面と場面をつなぎ、次の行動を促すことができるのではないだろうか。

iv）＜活動の維持＞

「優先順位が音楽。曲を聴くことが優先順位で、その中で聞きながら遊びをするという流れで、でも音楽の曲が終わりに近づいてくると変えなきゃいけないって、遊びよりも優先される感じで」（No.8）の語りから、何よりもまず音楽が優先されることが分かる。遊びを中断してまででも、音楽が流れていないと活動が続けられない。活動の維持のためには音楽が必要であることが分かる。

v）＜音楽と自身の感覚をつなぐ＞

「一回全部流すと、覚えられないんで、部分部分で、最後は総合的に流して。覚えられなくても自分の好きな感じで自由に体を動かす。できない子も中にはいてるので、ジーッとしてるんじゃなくて、見ながらでもいいし、自分の感覚でっていいますか、自分のあれで踊ってくれていいよーって」（No.5）、「完璧にこの曲が弾けるようになるっていう、弾けるようになりたいって気持ちもあるやろうけど、それだけじゃなくて、ドがここレがここって1つずつ段階を踏んでることにもなってるんやろうなって」（No.9）という語りがあった。1つ1つ音を確認していく作業は、ここを押さえるとこの音がなる、という自身の感覚と音の間をつなぐきっかけにもなる。このように音楽は自身の感覚という目に見えないものをつなぐツールになることが考えられる。

vi）＜優れた音楽に引き付けられる＞

「ちっちゃな楽器があってそれを皆で叩いて演奏しようっていうのもたまにやってたんですけど、やっぱり自分らでこうやって叩いたりするのと、実際にプロの方の演奏を聴くっていうのはまた違うのかなと思って」（No.1）、「ハープの先生とかギターの先生が来てやった時は、読み聞かせとかは最近みんな集まってきよるけど、もうね、がっさがっさがっさがっさ。その時だけはね、やっぱり皆聴くんよね。あれはやっぱり子どもに引き付けるものがあるんやろうね」（No.2）の語りからも分かるように、優れた音楽が子ども達の前で演奏されると、子ども達の意識がそちらに向く。絵本の読み聞かせ時に

子ども達は集まってはくるが、集中が持続しないため落ち着きのなさがうかがえる。しかし演奏家が子ども達の前で実際に楽器を持って音楽を演奏すると、子ども達は落ち着いて音楽を聴いている。この違いからも、生演奏による演奏家ならではの迫力と魅力が、子ども達の意識を引き付けていることが考えられる。この時、子ども達の意識と演奏家の意識はつながり、相互性があることがうかがえる。

③【生み出す】のカテゴリー

＜達成感＞の定義は、「音楽を役割分担して演奏したり、できるかもしれないものに対して取り組むことで、そこに調和が生まれ、さらに達成感を生み出すことができる」である。＜自己表現＞の定義は、「楽器や音を用いることで、自身を表現することができる」である。

ⅰ）＜達成感＞

「皆で 1 曲の曲を演奏して、それが出来た時に、役割分担っていうんかな、それがすごい達成感で、すっごい喜んでる子もいるのかなって。あなたは『ミ』ね、あなたは『ド』ねとか言って。それでスタッフが横について演奏して、なんかなかなかいいなと思って。共同作業で」（No.1）の語りから、役割分担をすることで 1 人ひとりに意識が生まれ、協力して 1 曲の音楽が出来上がる。そこには調和が生まれ、それが達成感を生み出す。また、「自分で弾いてる子たちに関しては、自分のできるかもしれないものに対して練習とかをして、やってるので、けっこうそれはやっぱり達成感になる」（No.7）の語りからも、音楽が子どもを挑戦させている。子どもはそれに挑み、その壁を超えることで「達成感」として子どもの中に生まれることが分かる。

ⅱ）＜自己表現＞

「A なんかはなんなんやろな、自己表現なんやろうね。彼らの世界はちょっとよう分からんけど、やっぱり自己表現の中でそういうのが出てくるんやろうね。なんか表現してるんかな」（No.2）、「触りに行こうとする。楽器を」（No.2）の語りから、楽器などの音が出る物をツールとして、自分の存在を表現すると同時に、他者にも自分なりの方法で自分の存在を伝えているのかもしれない。

また、「自動演奏が好きな子は、ゆっくりした曲なんやけどそれをまたさらにペースをダウンしてゆっくりしてみたりとか、自分の中でのこだわりやったりとか、その時の気分によってなんかなっていうのもあるかもしれないですね」（No.9）から、自分の気分を音楽で表現することもできる。自身の存在だけでなく、情緒も音楽によって表現しているのかもしれない。このように、音楽は自己を表現することを促進させる働きがある。

④【力になる】のカテゴリー

＜活動の原動力＞の定義は「音楽が背景にあることで活動することができ、また音楽が活動を奮起させるツールとなる」である。

ⅰ）＜活動の原動力＞

「やっぱり自分で好きな曲を流して、ゆったりと好きな遊びをしながら聞いて過ごされている」（No.5）、「その子がその曲がないとたぶん 1 日の流れとしては動きもできなくなってしまうのか・・（中略）じっとして聞くんじゃなくて、曲が流れてる中で自分の好きなことする。だけどちゃんと聞いてる。いきなりバーッと走って帰ってくるんで、あ、もうそろそろ終わるころなんやなっていう」（No.6）の語りから、音楽が背景に流れているからこそ自分の好きな遊びや活動ができる。音楽は活動をするためのエンジンで、音楽がかかるとともにエンジンもかかる。するとエンジンがかかれば車が走り出すように、子ども達の活動意欲を促進させ、子どもはそれをエネルギーに活動をすることができる。このことから、音楽は遊びなどの活動をする上で欠かせない要素であることが考えられる。

また、「活動の時に流したときに、やる気とか意欲とかそういうのを手助けしてくれるツールっていうんですかね。落ち着いてほしい場面に落ち着いた曲を流したら落ち着いて行動できる、そういうふうなのになるかもしれないです

ね」（No.8）、「気分を上げるっていうのはあるかもしれません。やっぱり聞きながらその曲のリズムとかペースに合わせて動いたりとか、される子もいるので、工作していても音楽に合わせてはさみを切ったりとか。組み立てたりとかっていう子も多少なりとはいると思うので、そういう効果はあるんじゃないかなと思いますね」（No.8）から、音楽が子ども達の気分を上げる、あるいは意欲を促進させる作用があることもうかがえる。

これらの点を踏まえ、音楽があることで子ども達は活動ができ、それだけではなくやる気や意欲を促進させる、力の源になるような作用があることが考えられる。

⑤【安全地帯】のカテゴリー

【安全地帯】のカテゴリーは＜安全地帯＞である。＜安全地帯＞の定義は「音楽を用いることで、雑音や不安を避けることができ、音楽の流れる空間を作ることで、自身の安全が保障されたテリトリーとして機能させ、それが安全地帯となる」である。

ｉ）＜安全地帯＞

「もしかしたら考えるに、雑音を聞かなくていい？（中略）居心地のいい空間にするものじゃないですかね。（中略）音楽ではあるんかもしれない。自己防衛なんかな？」（No.4）、「自動演奏聞く子に関しては、たとえばね、このピアノってここから音が出るので、ここの下に潜り込んで、なんか音が聞こえやすいような場所を求めて聞かれる子もいます」（No.7）の語りから、より音楽が聞こえる場所を自分から探して見つけていたり、音楽を聴くことで雑音を避けていることが分かる。また、「その男の子は、自分がその曲が好きやから、途中で何かを関わりに来られると嫌なタイプなんですよね。自分が夢中になってる曲を途中で遮られたりとか、嫌やから、その曲を流しながらコミュニケーションをとるっていう形にしてたりとか」（No.9）というように、自分の安心できる居場所を他者により侵害されると気持ちが不安定になり、安心感が得られなくなってしまうのである。

このことから、子ども達にとって音楽は安心できる居場所であるとともに、自分を守るためのテリトリーとして機能することが考えられる。

⑥【流れる】のカテゴリー

＜気持ちを維持させ、落ち着ける＞の定義は「音楽の持つ特有の流れが、拡散した情緒、つまりパニック状態を収束させ、音楽の流れにのせて再び情緒を流していけることで気持ちが落ち着いていく」である。

ｉ）＜気持ちを維持させ、落ち着ける＞

「音楽をかけるようになってから？暴力行為が減ったり、発作、パニック回数も前に比べては少なく感じるのと、短く感じる場合もある」（No.4）、「曲名は分からないですけど、ゆったりとしたテンポの遅いのを連続的に流していて、始めてから、終わってからすぐに変えに行って、同じようなものをずっと流してます」（No.8）、「激しい曲じゃなくてクラシックとかゆっくり目の曲やから、たぶんその子にとっては落ち着く曲なんやろな、っていうのはすごく見て取れるんです」（No.6）という語りがあった。これらのことから、音楽の持つ特有の流れが子ども達の情緒も流していることがうかがえる。また、「曲が終わりそうな頃にバーッと走って行って、最初から再生する。おやつの時間ってなっても、座らなきゃいけないけども、その曲そろそろ終わりそうって時はバーッと走ってしまうので、その子みんなが待ってるって状況になったりもするんですけど」（No.6）、「その男の子は、帰るときも流しておいてほしい。帰る準備をして自分が外に出て送迎の車に乗るまでは流してるんですよ」（No.9）の語りのように、音楽が流れていないと、おやつを食べることもできないし、安心して帰ることもできない。

このことから、音楽は子ども達の情緒を流すだけではなく、子ども達の生活を流すこともできることが考えられる。

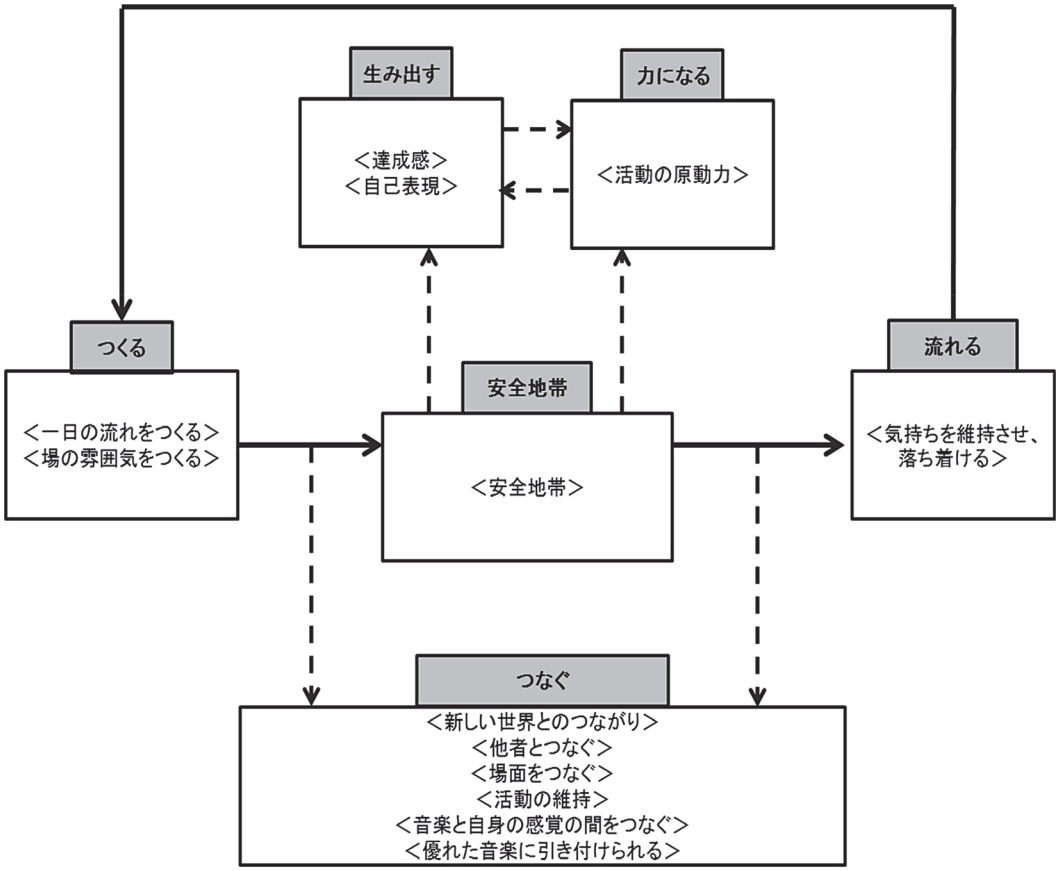

図 1　発達障害児における音楽の作用の構造

2. 発達障害児における音楽の作用の構造

発達障害児における音楽の作用の構造は図 1 のように表される。

音楽が流れることは、子ども達にはじまりを告げるサインになり、子ども達の一日をスタートさせる。1 日を音楽で始めることで、子どものその日常も形成していくような機能を持つ。また、音楽が施設内に流れることで、子どもだけでなくスタッフにも影響し、スタッフもその音楽により穏やかな気持ちになったりと、施設全体の場の雰囲気を【つくる】役割も持つ。よって音楽は、子ども達の日常や施設の雰囲気を【つくる】ことから始まる。

子ども達は日常を過ごす中で、他児との関わりや人同士が喋る声、また室内に限らず室外から聞こえる車や救急車の音などが不快になることがある。彼らが音楽を繰り返し聴く、音楽がより聴こえる場所を探し求め、その場でじっとしていることなどから、雑音などの不快刺激から自分を守る【安全地帯】を作っていることが考えられる。自分の安全が脅かされない居場所、あるいはテリトリーがあることで彼らは安心して日常を過ごすことができることが考えられる。

彼らは【安全地帯】が作られた上で、活動を始めることができる。楽器や手で音を鳴らしながら、自分の存在を確かめ自分なりに表現する。また、ゆったりした音楽をさらにペースダウンさせて再生するというような、その時の気分に合わせて音楽を流すことなど、いずれも自身の存在や気持ちを表現することを促進させる作用があることが示唆される。さらに、できるかも

しれないものに対して自ら楽器を演奏し、練習を重ね曲が弾けるようになるという過程は、達成感を【生み出す】こともできる。それは他児と協力し、役割分担して1曲の音楽を演奏した際にも生じる。1人1人の音が重なりそれが調和して1曲の音楽になるという体験は、達成感を【生み出す】ものであろう。音楽は自身の存在を表現することを促進させ自己表現を生み出し、かつ達成感も【生み出す】ことができる。

音楽が背景にあることで、音楽の持つリズムに合わせてはさみで紙を切るなどの工作もでき、それが結果やる気や意欲を手助けするツールにもなる。また、音楽が流れている中であれば自分の好きな活動や遊びを続けることもできる。これらの点からも、音楽は子ども達にとって活動するために必要なエネルギーを提供し、それが子ども達の【力になる】のである。

そのような日常を過ごしていく中で、子ども達に様々な場面とつながる機会が生まれる。施設の外部から演奏家が来て、普段触れない楽器や珍しい音を聴き、それが彼らにとって新しい世界とつながるきっかけにもなるし、施設内でも音楽を共有することで一緒に踊ったりとスタッフや他児とつながり、ノンバーバルなコミュニケーションを取ることもできる。また、音楽がつなげるのは新しい世界や他者だけではない。音楽を流すことが習慣化し、それをしないと次の行動ややるべきことに移行できないことや、音楽を気分転換として用いることで次の行動に移行できるなどから、音楽は子どもの場面と場面を【つなぐ】こともできる。切り離された場面を、連続性のある音楽によってつないでいき、子ども達の日常が流れていくのである。そのためには音楽は切れてはならない。音楽が止まってしまうと、彼らは遊びを止めてまで音楽を再生しに行くなど、彼らにとって音楽は遊びよりも優先されるものであり、音楽を流し続けることで活動を継続させることができる。

そして音楽は、情緒を収束させ、落ち着かせる。日常の中で、思い通りに物事が進まなかったり、不快な思いもすることも一方であるだろう。その結果パニックになったり、暴力や暴言などの問題行動につながることも考えられる。その際の子どもの情緒は気体のように拡散し、バラバラになっている。しかしその中で自分から音楽を流したり、スタッフが音楽をかけることによって、音楽特有の流れが子どもの拡散した情緒を再び【流れる】ようなきっかけとなり得る。その結果、パニックになりコントロールできなくなった状態から落ち着きを取り戻し、日常に戻っていけるのである。

以上これらの音楽の作用が、図1のように循環し、子ども達の日常を流していくのではないかと考えられる。発達障害を抱える子ども達は、時間管理の苦手さから日常をスムーズに過ごすことが難しい傾向にある。また、相手の気持ちを読み取ることや、場にそぐわない言動や行動をしてしまうことにより対人関係がうまくいかず、つながりにくい。さらに気持ちのコントロールも苦手で、癇癪を起こしてしまったり、自傷他害などの問題行動も見られる。そのような特性を持った子ども達にとって、音楽は子ども達の固まりやすい、あるいは拡散してしまいやすい情緒を水のように流し、かつ日常も流すことができる作用を持っていることが考えられる。

Ⅳ．考察

1．発達障害の子どもにとっての音楽

児童発達支援・放課後等デイサービスにて勤務するスタッフに、発達障害児における音楽の作用についてインタビューをし、M-GTA を参考にした分析を行った。その結果、音楽には【つくる】【安全地帯】【流れる】【生み出す】【力になる】【つなぐ】の6つの作用があるという結果となった。

発達障害を抱えた子ども達にとっての音楽は、日常を円滑に流し、かつその中で音楽を力にしたり他者や新しい世界とつながるツールとして作用することが考えられる。ASD の特性か

ら、先の見通しが立てにくく、日常の中で混乱しやすい傾向にある。しかし、音楽という比較的刺激となりやすいものがそこに介入することによって、彼らの中でそれがサインとして機能することが考えられる。例を挙げて言うならば、学校のチャイムがそれに当たる。学校での生活では、チャイム、または 1 日の始まりを告げる穏やかな音楽が流れることによって子ども達に「始まり」を告げ、時間の区切りを付けながら 1 日が流れていける。つまり音楽は、発達障害を抱えた子ども達の時間管理をする作用があり、子ども達は音楽をツールに切り替えをしていることが考えられる。児童発達支援・放課後等デイサービスに来所して自分から音楽をかけるのは、音楽をツールとして自分自身の中で時間の区切りをつくっていることが示唆される。

また、発達障害を抱えた子ども、特に ASD の特性としてある感覚過敏は、周囲のしゃべり声や車が走る音、エアコンの音など、私たちが普段さほど気にしないような音が、彼らにとっては非常に不快な刺激となり得る。その結果、耳を塞いで大きな声を出したり、泣き叫んだり、他者に危害を与えてしまうなど、パニックや問題行動を引き起こす要因となることが考えられる。しかし子ども達はその中でも、なんとか不快な刺激から自身を守ろうとする。自分の好む音楽を流し、あるいはより音楽の聞こえる場所に自分から身を寄せることで、そこに安心感が生まれる。さらに何度も同じ音楽を流すことについては、変わることのない安心できる場所をつくり出していることが考えられる。流れる音楽に一貫性がないと、彼らはその変化にうまく対応できず混乱してしまう傾向にある。しかし、同じ音楽が流れ続けている、変わらないということに彼らは安心し、自分を守ることができる。このことから、音楽には彼らに安心できる場所を提供することができると考えられる。

感覚の過敏さだけでなく、発達障害の特性ゆえに、タイムスリップ現象をはじめとして特異な時間感覚を持っていると言われている。時間の流れが理解できず、過去・現在・未来が彼らには断片的に感じられ、場面がつながらないのである。場面がつながらないことに伴い、彼らの情緒もつながりにくく、急に怒り出したりあるいは笑ったりといった情緒の不安定さもうかがえる。その「バラバラさ」を抱えながら日常を過ごしている彼らにとって、音楽の持つ「連続性」が彼らの「バラバラさ」を繋げる作用があると考えられる。単発としての音に対しては彼らには響きにくく、また単調な機械音も不快に感じ、豊かな情緒は流れにくい。しかし様々な音が重なりつながって、調和を生み出す「音楽」として流れ始めると、彼らの活動も流れ始め、かつ情緒も流れていけるのである。

さらに、その音楽の調和が、他者との調和も生むことが考えられる。特に ASD の子ども達は対人関係の形成に困難さがある。相手の顔のパーツ（目や眉、口など）は認識できたとしても、それを全体として統合することに苦手さがあり、ゆえに相手が現在どのような気持ちなのかが分かりにくい。また、声のトーンだけでは相手の気持ちを推し量ることが難しく、場にそぐわない発現や行動をしてしまい、対人関係におけるトラブルにつながりやすい。また、ADHD の持つ衝動性は、感情の抑制がうまくできず突然他者に手を挙げたり、相手を不快にさせるような言動を突発的にしてしまうなどの問題行動も引き起こし、孤立してしまう場合がある。いずれも全体として統合することの苦手さ、自身の感情がつながらずぶつ切りになってしまうことにより対人関係の形成に困難が見られるが、音楽はその他者とのつながりにくさを補う作用があることが考えられる。音楽が流れることで言語を介さずともスタッフと一緒に踊ることができるし、他児と役割分担をして 1 曲の音楽を演奏することもできる。役割分担をして 1 曲の音楽を演奏できたことによる達成感、周囲から評価されるという体験により、他者と一緒に何かをするという関係をつくることを促進させるのではないかと考えられる。また、子どもがピ

アノで弾いている音楽に対し、スタッフが「何を弾いているの？」と聞くと「○○先生に教えてもらった曲を練習しているの」と答えることに関しては、音楽がその施設全体に影響し、共通言語としてスタッフと子どもをつないでいることが分かる。

音楽は発達障害を抱えた子どもの場面や情緒をつなげるだけでなく、施設内やスタッフ、他児との調和ももたらす作用があることが考えられる。

2. 発達障害と音楽の効果的な利用法

発達障害を抱えた子ども達にとって、音楽が時間の区切りを告げるサインや安心を得るための場所として機能すること、そして子ども達の断片的な場面や感情をつないでそれを流し、他者との調和をもたらすことが分かった。そのような作用を持つ音楽の、発達障害を抱えた子ども達に対する効果的な利用法を以下に述べたい。

まず、ASD の特性から、時間的見通しが立ちにくく、1 日の流れがつかみにくい。また、予測できない変化にうまく対応できず、混乱してしまう傾向にある。視覚的な材料を用いて 1 日のスケジュールを記載したものを分かりやすい場所に掲示することで、子ども達は視覚的に時間の流れを確認できる。そこで、聴覚過敏である子どももいることを配慮しながらも、学校でのチャイムのような聴覚的に吸収しやすい音楽を用いると、より時間の区切りが分かりやすく、次の行動に移行しやすいのではないだろうか。また、ASD を抱えた子ども達に、その特性として睡眠障害が生じるケースもある。夜遅い時間でも目が冴えていることにより、昼間の活動に支障が出たり、体調を崩す原因にもなり得る。できるだけ毎日決まった起床・就寝時間を定め対処することが求められるが、この点においても起床する時の音楽、就寝する前のゆったりした音楽などを用いると、睡眠リズムが整うことが考えられる。

また、子ども達が繰り返し音楽を聴いている、又は音楽がより聞こえる場所に動かずにいるといった場合、彼らは自分を不快な刺激から守ろうとしていることが考えられる。他者の喋り声や外から聞こえる音（救急車の音など）に対し耳を塞ぎ大声で泣き叫ぶなど、感情のコントロールができずパニック状態になることがある。また、音楽が再生されなくなると「おんがく」と言ったり、スタッフの手を持って CD（Compact Disc）のある場所まで連れていくクレーン現象も見られることがある。彼らがそのように音楽を求めていることは、同時に安心感を求めているのではないかと考えられ、その際は音楽を用いて彼らが安心できる居場所、つまり安全地帯を提供すると良いのではないだろうか。確かに学校や施設など集団で過ごす場などは、1 人にそのような安全地帯を提供し始めてしまうと、周りの子ども達のタイムスケジュールにも影響してしまうだろう。彼らが連続的に音楽を流し続けること、音楽がより聴こえやすい場所を求めそこから動かないことなどの背景が分からないと、その後の他の子ども達のタイムスケジュールに影響してしまうため音楽を切ってしまうかもしれないが、それでは「安心できる居場所、テリトリーが侵害された！」としてパニックになり、問題行動を起こしてしまうことも考えられる。そのため、彼らが音楽を流し続ける背景の 1 つとして、そこが彼らの安全地帯なのだということを踏まえ、できるだけ刺激せず様子を見守ることが必要であると考えられる。音楽を提供できるものとして、ヘッドホンの活用も有効であろう。ヘッドホンを使用すれば、周りの子ども達への影響が比較的少なく、そして発達障害を抱えた子どもも音楽をより身近な安全地帯、自分の居場所として感じることができ、他の刺激からも侵害されにくい。特にヘッドホンに抵抗がない様子であれば、利用してみても良いのではないだろうか。

発達障害を抱えた子ども達は、言葉を使って相手に自分の気持ちを伝えることが難しい。ま

た、相手の気持ちを推し量ることも苦手で、スムーズな対人関係を持ちにくい。そのため他者とトラブルを起こすだけでなく、自分の頭を叩く、手を噛むなどの自傷行為をしてしまうなどストレスを抱えやすい傾向にある。しかし音楽は、考察の 1 の項目で述べた、タイムスリップ現象をはじめとした場面のつながりにくさ、それに伴い生じる情緒面の不安定さをつないでいくように、その滞りやつながりにくさを流す作用がある。音楽をコミュニケーションのツールとして取り入れることで、ノンバーバルな関係が取れる。そこには言葉を必要としない情緒的な交流が生じており、子どもと他者をつないでいる。レクリエーションなどで音楽遊びをすることは、他者との関係をつくることを促進させることにつながると考えられる。

他にも、ASD を抱えた子どもは手先が不器用で物を作ることに抵抗を感じることが多い。うまくできないことによる苛立ちや、周囲との劣等感が生じ、自信を無くしてしまう傾向にあるが、そのような場面でも音楽が有用な場合がある。ゆっくり目の曲調よりも、比較的リズムのある音楽だと、そのリズムに合わせてハサミを動かしたり、シールを貼ったりと、音楽の持つ特有のリズムが子ども達の活動を促進させるかもしれない。そこで成功体験を積むことができれば、子どもの自信にもつながりまた違うものに挑戦する意欲につながる可能性も考えられるのではないだろうか。

Ⅴ．おわりに

繰り返し音楽を流し続けたり、音を出して自身の存在を示したり、音楽の流れる場所に身を寄せたりするのはなぜだろうか。発達障害を抱える彼らがなぜそうするのか、その背景に何があるのかを真に理解することは難しく、不可能に近い。しかし今回、発達障害を抱えるスタッフの方に子ども達の音楽との関わりについて調査する中で、音楽が彼らにどのような作用をもたらし、どのような効果を生むのかが少し分かった。そして、なぜそうするのか、どのような意味があるのかを話し合いながら考えることが、発達障害を抱える子ども達の支援において、重要な作業の 1 つであったように筆者には思えた。今後も発達障害への支援において、発達障害の特性であるからこのような行動を起こすという考え方ではなく、彼らの言動や行動の背景を環境との関係にも目を向けながら発達障害支援に関わっていきたいと考える。

本研究では、発達障害を抱える子ども達にとって音楽がどのように作用しているのかについて明らかにした。しかし、調査協力者が 9 名でありデータ数が少ないこと、発達障害を抱える子ども達の中には、疑われるものとして診断を受けていない子どもも含まれているため、発達障害があるかどうかは調査対象者の主観によっている。また、自閉スペクトラム症、注意欠如 / 多動症、限局性学習症などの明確な障害の分類を行わずに考察しているため、それぞれの診断における音楽の作用については明らかにはできていない。それぞれの診断別に、音楽がどのように作用するかについては、今後の発達障害支援において重要であると思われるため、今後の研究における課題であると考えられる。

謝辞

本研究に関して、終始ご指導ご鞭撻を頂きました、花園大学大学院社会福祉学研究科の橋本和明教授に心より感謝申し上げます。また、本研究におけるインタビューにご協力を頂いた児童発達支援・放課後等デイサービスのスタッフの方々に心より感謝申し上げます。

文献

馬場存・坂上正巳・門間陽子・中野万里子・屋部操･村井靖児（2001）．音楽療法の臨床的効果について－認定音楽心理士を対象としたアンケート結果から－．国立音楽大学音楽研究所年報第 15 集

DeCasper, A.J.& Fifer, W.D.（1980）. Of human bonding: Newborns prefer their mother's voice. *Science, 171, 303-306.*

遠藤晶（1998）. 幼児の手あそびにおけるパフォーマンスの年齢による変化. 発達心理学研究 , 9（1）, 25-34.

橋本雅雄（1995）. ウィニコットの早期精神発達理論について . 牛島定信（編）ウィニコットの遊びとその概念 . 岩崎学術出版社 .

細川速見・和田幸子（2006）. 音楽あそび－障害児と共に育ち合う－ . 三学出版.

星野圭朗（1979）. オルフ・シューベルク理論とその実際 . 全音楽出版 .16.

木下康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－ . 弘文堂 .

黒山竜太（2009）. 発達障害児とセラピストとの相互作用に及ぼす音楽の効果 . リハビリテイション心理学研究 , 36（1）, 15-29.

中山晶世・二俣泉・竹内康二（2006）. 音楽療法士のための ABA 入門 －発達障害児への応用行動分析学的アプローチ－ . 春秋社 .

中島恵子･山下恵子（2002）. 音と人をつなぐコ･ミュージックセラピー（Co-Musictherapy）. 春秋社

大谷正人（2007）. 発達障害児の音楽療法についての一考察－音楽学と発達臨床心理学の関連から－ . 三重大学教育学部研究紀要 , 58, 人文科学 , 29-32.

小澤拓大・後藤裕子・中武亮子（2018）. 多感覚を使った音遊びの保育現場への導入に向けて－多感覚を使った音遊びが子どもの発達に及ぼす影響－ . 宮崎学園短期大学紀要 , 10, 56 - 62.

遠山文吉（2002）. 障害のある子どもの音楽療法－音楽と癒し－ . 現代のエスプリ . 至文堂 , 424, 135-144.